

ろう教育研究部 今後の研究計画について



ろう教育研究部
大鹿綾
(東京学芸大学)

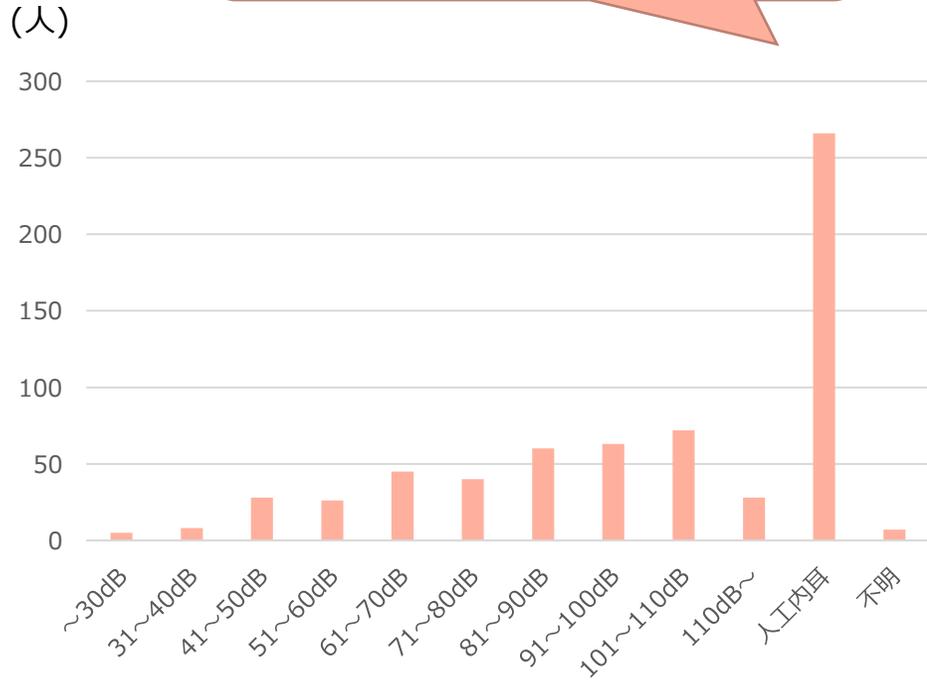
石川の報告から

－「周因との手話によるコミュニケーション」に注目して－

- ・**幼稚部、小学部**では、「聴覚優位で手話を使わない児童生徒とのコミュニケーションが難しい」、「児童生徒が（手話を使わないため）何を言っているのか分からないから聴教員に通訳をお願いする」、「人工内耳や聴力の軽い児童生徒が増えたから手話を使う必要を感じない教員がいる」など、**子どもとの関わり**に関する指摘があった。
- ・**中学部・高等部**では、そのような声は減少し、「障害種が異なる学校との異動が多いから、聴教員の手話習熟度がなかなか向上しない」、「一緒に仕事をする相手が手話のできる聴教員だったから良かった」など、**教員同士の関わり**に関する指摘があった。

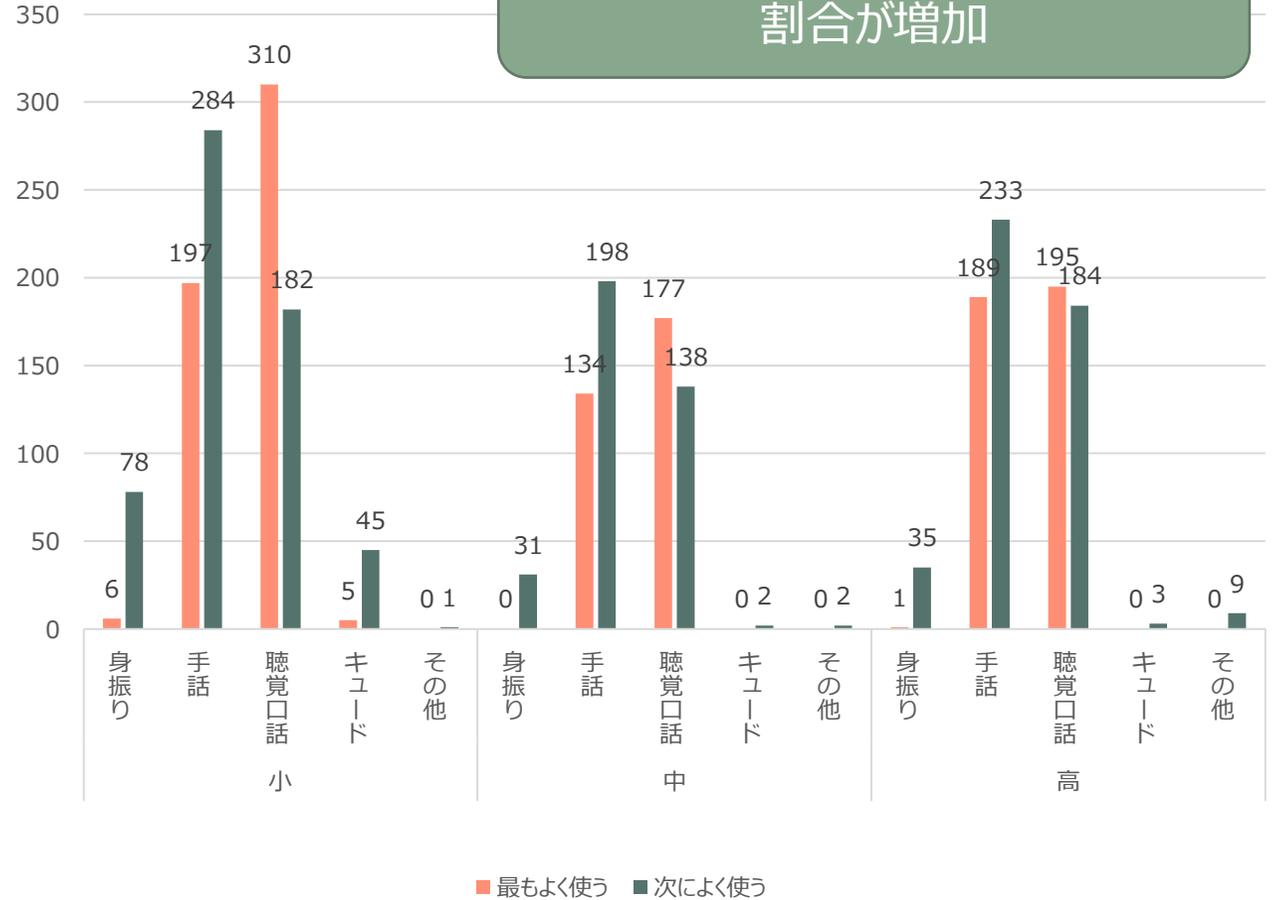
ろう学校全国調査（大鹿, 2023年度実施）から

小学部
41.0%（2022年度）
←36.8%（2017年度）



(人)

学部が進むと手話を最もよく使う者の割合が増加



ろう学校全国調査（大鹿,2023年度実施）から

小・中学部	第4回	聴児（2022） （聴障児／聴児）
学習面か行動面で著しい困難を示す	33.0	8.8 (3.8倍)
「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」に著しい困難を示す	27.7	6.5 (4.3倍)
「不注意」又は「多動性－衝動性」に著しい困難を示す	10.7	4.0 (2.7倍)
「対人関係やこだわり等」に著しい困難を示す	7.2	1.7 (4.2倍)
教員の印象（内、診断あり〔全体〕）	28.2 (19.7〔5.5〕)	—

- ・発達障害様困難を併せ有する者は聴児より多く、3割近く
- ・医師等による診断結果ではなく、担任のチェックリストによるもの
 - 原因は特定されないがこれまでの聴覚障害児教育のやり方だけではうまく力を発揮できていない、「困っている子」として

教員の専門性

- ・もちろん、個人差があるのは大前提の上で…
- ・ろう学校の教員になるためには「基礎免許：幼、小、中、高」が必須
→なぜなら、学習指導要領に基づいた準ずる教育（きこえる学校と同じ教科内容）

を行うこととなっているから

- ・特別支援学校（聴覚領域）の免許は「努力義務」状態
- ・教員養成段階において、特別支援学校免許と共に基礎免許として取らせるのは小免（幼・中・高も選択可）とする大学が多い
- ・中・高等部では特別支援学校免許取得者は少ない傾向
- ・各自治体で認定講習を行うなどして所持率向上に努めている

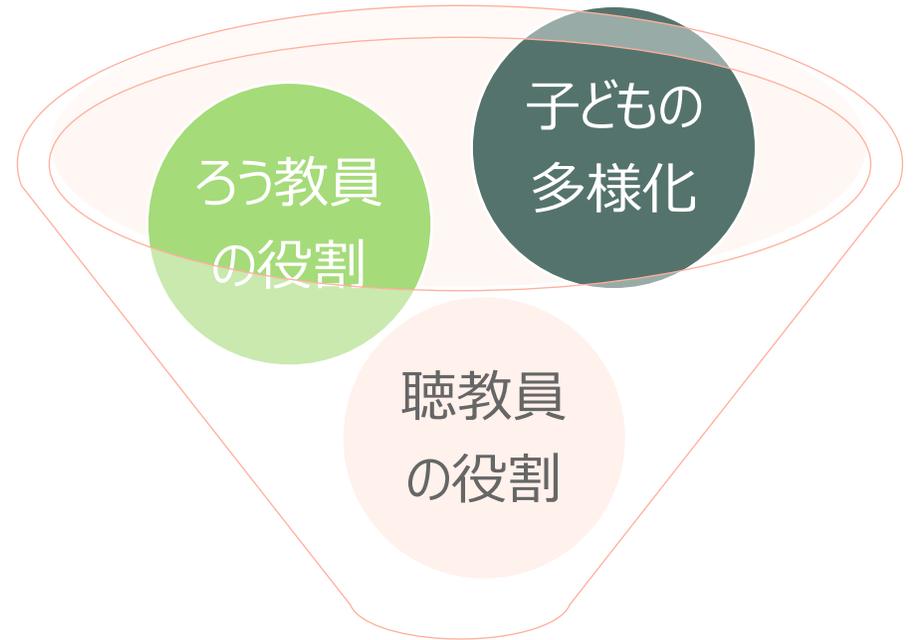
(R5度,文科省)	当該障害種所持 (%)
聴覚	2189 (59.7)
視覚	1138 (45.9)
知的	45503 (90.2)
肢体	11018 (87.1)
病弱	2208 (81.8)
全体	62056 (86.3)

ろう教育研究部の研究に向けて

- ・発達段階に応じた伝える／伝わる力とは
- ・ろう教員、聴教員が共にその力を身に付けるには
- ・ろう教員、聴教員が共に協力し合うためには
- ・校内研修だけでなく、より広く効果的なアイデアは



全校ろう学校へのアンケート
先進事例の収集、インタビュー調査



子どもたちともしっかりと伝わりあうために
子どもたちをもっと伸ばすために